# 高校生対象の2年間にわたる暴力防止プログラムの効果

○上野淳子（四天王寺大学）
松並知子（同志社大学）
下村淳子（愛知学院大学）
南畑好美＃（大阪府立東淀川高等学校）
赤澤淳子（福山大学）
井ノ崎敦子＃（徳島大学）
北山裕子＃（大阪府立東淀川高等学校）

キーワード：アサーション，暴力観，デートDV

## 問題と目的

高校2年と3年の2年間にわたって暴力の一次予防プログラムを実施し，その効果を検証した。

## 方　法

### 手続き

2年次3回，3年次2回の計5回，1回100分のプログラムを高校の授業内で実施した。効果検証アンケートは2年次2回（事前・事後），3年次3回（事前・事後・2か月後のフォローアップ）の計5回行った。

### 参加者

2年次のプログラム群は当該年度の全プログラムを受講した19名，3年次のプログラム群は前年度から引き続き全プログラムを受講した14名である。同学年別クラスの対照群はアンケートのみ参加した（2年次25名，3年次26名）。2年対照群と3年対照群は別集団であり，2年間ともプログラムを全く受講していない。ただし，倫理的配慮から対照群には各年度の全アンケート終了後にプログラム内容をリーフレットにしたものを配布し，説明を行った。なお上記は全て社会的望ましさ得点（北村・鈴木，1986）が18点未満で欠損値のない者に限った人数である。

### 効果検証アンケート

参加者は一連のアンケートのみで用いるコードネームを作成し回答した。

**暴力観**　デートDVの身体的暴力，性的暴力，精神的暴力のうち軽侮，脅迫，束縛にあたる5項目について，「完全に暴力にあたる」～「全く暴力にあたらない」の7件法で回答を求めた。

**性差観**　性差観スケール（伊藤，1997）の因子負荷量上位10項目に，4件法で回答を求めた。

**共感性**　共感性プロセス尺度（葉山・植村・萩原，2008）の他者感情への敏感性因子と視点取得因子各5項目に，5件法で回答を求めた。

**アサーション**　青年用アサーション尺度(玉瀬・越智・才能・石川，2001）の関係形成因子と説得交渉因子各8項目に5件法で回答を求めた。

**葛藤場面対応**　3年次のアンケートのみで回答を求めた。部活動で友人からあるメンバーを仲間はずれにしようと誘われた時どう答えるか，一コマ漫画のふきだし内に記述を求めた。

## 結果と考察

2年次のデータで2（事前・事後）×2（プログラム群・対照群）の分散分析を行った。暴力観で交互作用が見られ（$F$=5.44，$p$<.05），プログラム受講により暴力を認識しやすくなることが示された。性差観は両群とも事後のほうが低く，性差を認識しにくくなっていた（$F$=21.37，$p$<.001）。

3年次のデータで3（事前・事後・フォローアップ）×2（プログラム群・対照群）の分散分析を行った。暴力観（$F$=10.74，$p$<.01）と共感性の視点取得（$F$=7.51，$p$<.01）でプログラム群が対照群より高かった。前年度からプログラムを受講したことで，暴力を認識しやすく，他者の立場に立てるようになったと考えられる。共感性のうち他者感情への敏感性は両群ともフォローアップ時に高くなっていた（$F$=3.34，$p$<.05）。

プログラム群の全5回のアンケート結果の変化を一要因分散分析で検討した。暴力観は高くなり（$F$=3.53，$p$<.05），性差観（$F$=2.98，$p$<.05）とアサーションの説得交渉（$F$=3.65，$p$<.05）は低くなっていた。2年次の結果から性差観の変化はプログラムの効果ではないことが分かっているが，プログラムにより他者を説得交渉する以外のスキルが獲得される可能性が示された。

葛藤場面の記述を,「仲間外れへの誘いを断っているか」「仲間外れを止めようとしているか」「他者への気遣いが示されているか」「問題解決を試みているか」についてそれぞれ4段階評価するルーブリックを作成し採点した。採点は共同研究者3名で行い，一致率は87.80%であった。一致しなかった記述は採点者間で協議し，共同研究者全員の承認を得て確定した。3（事前・事後・フォローアップ）×2（プログラム群・対照群）の分散分析を行ったところ，合計得点（$F$=11.00，$p$<.01），「仲間外れへの誘いを断っているか」（$F$=11.22，$p$<.01），「仲間外れを止めようとしているか」（$F$=3.52，$p$<.10）でプログラム群が対照群より高く，2年次からのプログラムによって葛藤時に望ましい対応ができるようになっていた。

暴力防止プログラムは即時的には暴力観を変化させるだけだが，2年という長期にわたり定期的に実施することで，共感性やアサーションスキルの変化も起こすことが明らかとなった。

## 付　記

本研究はJSPS科研費JP16K01805の助成と福山大学学術研究倫理委員会の承認を得て実施した。